



齋藤 育夫 | 社団法人東北経済連合会副会長

ワールドカップ雑感

2006ワールドカップはイタリアの優勝で幕を閉じました。ジダンの頭突きのおまけ付きで。日本は一勝も出来ずあっけなく予選敗退。第一戦が全て。後半10分間で3点も取られるとは。技術、専門的なことは門外漢なので何も言えませんが、今回のWカップを見ていての雑感を少々述べてみます。

まず、久しく言われていた「決定力」不足が露呈したこと。これはスポーツ界に限らず、「結果」よりも「手続」を大切にする日本特有の社会構造、或いは国民的特徴が影響しているのではないかと感じてしまいました。

サッカーは11人で戦う団体競技であり、もちろん「組織力」と「個人のスキル」の総合力で勝負するスポーツです。

しかし、どうも日本は中盤での組織的な形づくりにこだわるあまり（でも、こういうボール廻しはそれはそれで素晴らしいなあと感じてしまいますが）、ゴールという「決定力」を持ち得ない。役目がシュートすることにあるFWがゴール前まで迫ってもまだパスしようとする。見ていて決して積極的な（ゴールを目指した）パスには思えませんでした。

このことが、日本のいろんな組織における「結果よりもプロセス」を大事にする風土とダブって見えてしまうのです。

ゴールは11人でいっしょに蹴るものではなく、ストライカーが一瞬の“判断”いわゆる“決断力”で決めるものでしょう。

ミスを犯さない安全な或いはリスクの少ない方法が最終的な組織判断とされることの多い日本社会、誤解を恐れず言うなら責任やリスクを負わない社会の特徴がサッカーボールというスポーツにも表れているんじゃないのかなと思いました。

人事評価、業績評価などの制度が導入されている昨今ですが、評価が減点主義になりかねないのも、このような特質によるものではないでしょうか。

新聞等で行われているようにトルシエの「組織」重視型サッカーからジーコの「個人」重視型サッカーへの転換が急激に過ぎたという話もありますが、「組織と個人」の問題は、サッカーのみならず、会社等の組織の活性化においても極めて重要なテーマであると思います。最近目にする「人間力」の養成や「人財立国」の実現などにおいても、ベースに置く必要のあるテーマではないかと思った次第です。

ともあれ4年に一度の一大スポーツイベントは終わりました。民族対立の激しかったユーゴスラビアの監督として1990年イタリアWカップ初戦の西ドイツ戦にユーゴ共和国メディアの注文通りに各共和国から選手を先発させ、惨敗してみせ、メディアの要求を沈黙させたうえで、新たな選手起用により準々決勝まで進んだオシムがジーコの後を継ぎます。

ジーコとは異なるであろうオシム・サッカーが私達に何を教えてくれるのか、今から楽しみにしています。

(岩手県商工会議所連合会会長 さいとう・いくお)